

「礼」「御武威」「雅び」

—徳川政権の儀礼と儒学—

渡辺 浩

東京大学

1. 儒学の「礼」

「礼」は、儒学における特徴的な概念である。例えば英語では、ritual, rites, manners, propriety, rules of proper conduct等と訳されるが、どれもその意味を十分には伝えていない。おそらく西洋語には翻訳困難なのである。「礼」は、当人の立場とその関係する相手との関係とに応じて定まった、適切な行為の型である。政治制度・朝廷や民間の儀式・年中行事・個々人のライフサイクルに応じた通過儀礼（冠婚葬祭等）から、挨拶や食事の作法等を、すべて含む。

適切な行為であるか否かは、個々人がそれぞれの価値観によって判断することだ、などとは儒学者は考えない。誕生から死に至るまで、あらゆる場合にに応じた正しい行為の型があり、それにみずから進んで従って生きることが、「礼」を知らない禽獣とは異なる、人間らしいことだと考えるのである。「礼」は、古代に実在したとされる理想的な王朝の時代の王たちによって制定され（従って、儒学の經典に詳しく記述され）、その後の帝王等によって時代に応じて必要な修正を施されたものである。但し、それも恣意的に制定・修正されたものではない。「礼」は、「道」、すなわち正しいこの世の秩序のありよう、正しい人間関係のありようの具体化・表現なのである。そして、その「道」は、およそ人たる者は誰もが、従って行くべき、生きるべき「道」なのである。

この「道」に従って生きれば、褒美として来世における幸福が約束されるなどとは、儒学者は考えない。儒学者は、来世の存在を信じないから。また、この「礼」に従わないと、統治者から刑罰が下るとも、儒学者は考えない。「礼」は「法」のような規範ではなく、模範に倣ってなされる自主的な規律であるから。「礼」への違反は、罪というよりは恥なのであり、それ故、およそ人らしく生きようという最低の自尊心のある人は、誰もが、みずから「礼」に沿って生きるはずなのである。

そして、統治者は、この「礼」に従って生きる人類の模範であるはずであった。彼が、「礼」に沿って、正しく振る舞うとき、人々はそれを慕い、それに憧れ、自分もそのように生きようとするはずだ、というのである。確かに現在でも、優勢な文化の伝播はそのような影響力によって実現する。強制ではなく、魅力によるのである。そして、儒学ではそのような影響力による感化こそが、統治の本来的な在り方だと考える。従って、法と刑罰による強制は、できれば無いことが望ましい、せいぜい副次的な手段に過ぎないのである。以上のような儒学の「礼」の観念は、後での議論の関係で特に注目すべき、次のような特質を有している。

第1に、「礼」は統治の基本手段であるため、特に朝廷における儀式や儀礼が、重要な意味

を持っている。孔子は、ある重要な儀式（「禘」）について、それを正しく行うことができるようであれば「天下」を治めることも容易だとさえ述べている（『論語』八佾）。

第2に、「礼」には意味がある。それは、「単なる形式」ではない。それは、「道」のありようを具体的な型として表現したものであり、宋代以後の主流の儒学（「朱子学」）の用語で言えば（ほぼ「道」と同義の）「理」の現れなのである（「礼者、天理之節文、人事之儀則也」、朱熹『論語集注』学而）。無論、特に清代には、主観的な判断の正当化に利用されうる「理」概念への反撥から、専ら客観的な「礼」の重要性を強調する儒学者もいた（参照、Kai-wing Chow, *The Rise of Confucian Ritualism in Late Imperial China: Ethics, Classics, and Lineage Discourse*, Stanford University Press, 1994. 張寿安『以礼代理：凌廷堪与清中葉儒学思想之転変』河北教育出版社、2001）。しかし、彼等も、「礼」の根底に普遍的な道理のあることは否定しない。例えば、亡くなった自分の先祖を深い敬意をもって祭る儀式は、各人にとって、その存在の源である親・先祖ほどに尊いものは無いという明確な道理に支えられているのである。従って、親を親と、子を子と、君主を君主と、夫を夫と、妻を妻と呼んで誤らないこと、すなわち「名を正す」（「正名」）ことは、「礼」の前提として重大な意味を有している。一般に、名付けとは、区別し、区分することである。「名」が正確であれば、その人の立場、「分」が明確となり、従って、どのような「礼」が適用されるべきかが確定する。

第3に、「礼」は単に正しいのではなく、美しい。「礼」が人々を「観感而興起」せしめる（朱熹『論語集注』為政）魅力は、その「文」（あや）が、それを見る人々の心を動かすことにもよる。それは単に、練達の茶人の所作のような、流れるような行動の美をいうわけではない。朝廷における儀式ともなれば、参与する者がそれぞれの立場（「名」「分」）に相応しい、「文」ある姿をすることも、当然に要求される。そこでは、衣装・冠等が身分象徴となっており、統治階級内部で、そして外部に対して、それぞれの身分を相互確認せしめることになる。社会学的に言えば、それらの絶対に肉体労働ができないような服装は、肉体労働者との隔絶した距離を示唆し、確認する顕示的消費（conspicuous consumption）として、統治の安定化に機能する。さらに、統治階級内部での序列化にも機能する。

上記の3点は、例えば明朝の朝廷における正式の儀式にも、よく示されている。そこでは、高位高官が序列通りに皇帝の御殿の前庭に整列する。美しい文官の衣装の胸には、鳥の模様が刺繍されている。最高位の者にはそれにふさわしく鶴のそれが、そして下位の者では、例えば、シャコ（鷓鴣）のそれが。一方、武官の衣装の胸には、獣の模様である。最高位の者には虎のそれが、そして下位に行くと例えば熊のそれが。では、皇帝の胸には？ 無論、龍の模様である。龍は、鱗を持つが、鋭いかぎ爪の付いた4本の脚をも持つ。そして、水に住み、地に潜むが、空をも飛ぶ。龍は、あらゆる動物の範疇を超越する。それと同様に、天子は文官・武官の別を超越して、百官有司と天下の万民に君臨するのである。

2. 徳川将軍をめぐる儀礼と儀式

徳川時代(1600-1867)の日本の事実上の国王、徳川将軍も、多種多様の儀式・儀礼に従事した。将軍の一年は、次々と行われるこれらの儀式に参加することに追われ、その合間を縫って、

ようやく今日いう政務に携わったようにさえ見える。実際、十一代将軍、徳川家斉は、全ての儀式に出席した一年を振り返り、「我も今年は皆勤せり」と語ったという（『文恭院殿御実紀』附録巻三）。しかし、将軍は、中国の皇帝、即ち天子と異なり、「天」から万民を統治するように「命」を受けていると称して「祭天」の儀式を挙行することはしない。儒学の經典に則って、儀式・儀礼が制定されたわけでもない。

それは、ただ先例に則って正確に再演され、再現され続けた。朝鮮国王の使いとして江戸を訪れた朝鮮通信使一行のある人は、日本では「先例」という語ばかり聞くと述べたという（南川維遷『金溪夜話』）。事実であろう。その意味で、文化人類学者の言うorthopraxyは、明確だった。

しかし、将軍が行っている無数の儀式の意味は、不明確だった。そもそも、彼の統治の正統性を説明するorthodoxyさえ曖昧だったのである。彼は、「天命」を受けた「天子」だとは称さない。「教会」などの宗教組織による聖別が行われるわけでもない。徳川家康の子孫であることは、特定の将軍がその地位にあることの説明にはなったが、「血統カリスマ」は、何故そもそもその「血統」が正統な統治権を保証するのかの説明はできない。無論、当時の国制を説明する成文憲法も無かった。法学者もいなかった。その一方、多様な解釈を許す様々な儀式が真剣に行われ続け、確かにその実行が最高権力者の「勤め」の主要部分をなしていたのである。

代表的なものを見てみよう。

第1は、初代将軍徳川家康を始めとする、先祖たちの霊廟や墓所への参詣である。とりわけ、日光東照宮への「御社参」は、膨大な人数と費用を要する「かぎりなき大礼」（『有徳院殿御実紀』附録巻三）だった。それらは、庶民もした先祖の墓参りの大がかりなものにすぎないようにも見える。儒学的な「孝」の「礼」の行為とも見える。また、現在の将軍が、家康と歴代の将軍との子孫にして後継者であることを確認し、誇示する機会とも見える。

第2は、大名・旗本、高位の僧侶等の接見（「御目見」）である。「御目見」をする者は、往々、遙かな距離を隔てて平伏するだけであり、実際に「謁見」するわけではない。意味のある対話がなされるのも、稀である。これは、君臣関係の存在を確認する儀式のようだが、「御目見」するからといって、僧侶を「家来」と見るのは無理であろう。それ故、「御目見」自体は、ただ将軍の権威への畏敬の態度を示す機会に過ぎないとも見える。現に、将軍の政治の顧問に与ったある学者も、「天下ノ諸大名皆々御家来ナレドモ、……下心ニハ禁裏ヲ誠ノ君ト存ズル輩モ可有。当分唯御威勢ニ恐テ御家来ニ成タルト云迄ノコトナド、ノ不失心根バ、世ノ末ニ成タラントキ、安心難成筋モ有也。」（荻生徂徠『政談』巻之二）などと指摘している。事実、江戸時代末期になると、自分の真の主君は将軍ではなく、禁裏様だと主張する大名が現れたのである。

第3に、京都の禁裏の使いを迎えての「将軍宣下」の儀式、及び年中行事としての、禁裏との使節と贈り物の交換である。但し、「将軍宣下」は、禁裏がそれによって「大政」を「委任」したことを必ずしも意味しない。そのような解釈は、徳川時代の中で広まったものである。京の禁裏が江戸の徳川宗家の当主を「征夷大將軍」に形式上任命するとは、つまり何を意味するのか。文字による規定はどこにもなかった。

第4に、朝鮮国王・琉球国王からの使節の接遇である。また、それよりはるかに非公式の扱

いではあるが、貿易を許している唯一の西洋の国、オランダの東インド会社の長崎商館長を毎年「御覧」になる行事もあった。それは、確かに將軍の權威を誇示する機会であつたろう。しかし、朝鮮国王と禁裏様・將軍様がいかなる関係にあるのか、琉球国王とはどうなのか、それも曖昧だった。

第5に、本来の目的はともかく、實際上儀式化した多種多様な行為があつた。例えば、將軍の代替わり後間もなく全国各地に派遣される「巡見使」は、実際に各地の統治状況をどこまで調査しえたかは疑わしい。しかし、大名の領地にも、広く將軍の支配が及んでいることを再確認する意味はあろう。將軍の外出の際の行列も、沿道に念入りな準備と敬意の表示を強いることによって、統治者の重々しい示威行進とも見えた。一方、江戸の内郭にある二つの大きな神社、神田明神と山王権現の、町人たちによる祭りの行列も、將軍と無関係に行われれば、町人の勢力を誇示する示威行進になったかもしれない。しかし、將軍が形式的にせよ観覧することによって、それは「天下様」の祭り、「天下祭り」となって、逆に將軍の統治を寿ぐ意味を持ったようにも見える。

また、將軍の住まいを「奥」に持ち、「表」に將軍との関係に対応した距離と位置に彼の臣下たちの控えの間を配置した千代田城本丸御殿は、それ自体、政府組織の比喩となっていた。さらに、千代田城を彼の臣下たちの屋敷が囲み、その周囲に町人の居住地と農村が広がる江戸という都市は、それ自体、全国の統治構造の比喩となっていた。儀式の舞台装置自体が、象徴的意味を結果として持ち、曖昧なままに人々の心に何かを刻みつけ、支配を支えたのである。

欧州のいわゆる絶対王権は、常備軍と官僚制が支えたと言われる。しかし、徳川時代の日本では、常備軍が官僚組織であり、官僚組織が常備軍であつた。超長期安定軍事政権だった。そして、この軍事政権は、その圧倒的な武力によって戦国状況を封じ込め、現に「泰平」を維持しているという事実以外に、特にその存在を正統化する理論的根拠を持たない。「天下泰平」を有難く思え、というだけであり、事実として「天下泰平」でなくなれば正統性自体が直ちに動揺するという性質を持っている。しかし、大多数の人が、「戦国の世」に戻ることを恐れ、武家政権の「御武威」「御威光」に畏れ入っている限り、それで支配は安定的に持続するのである。

それ故に、理論ではなく、行為それ自体が、重要だったのであろう。行為を支える「道」や「理」が不明確でも、儀式は機能する。David I. Kertzer氏の言うように、「儀式は、人びとがおなじ価値を共有することなしに、儀式のおなじ解釈さえ共有することなしに、社会的連帯を促進できるのである」(*Ritual, Politics, and Power*, 1988. 『儀式・政治・権力』勁草書房、1989、p.93) Edward Muir氏の表現を借りれば(*Ritual in Early Modern Europe*, Cambridge University Press, 1997, p.230.)、いわば国家儀式それ自体が、constitution(国制・憲法)だったのである。そうだとすれば、国家儀式の改革は、「憲法改正」の意味を持ちうることになる。

その観点からして注目されるのが、朱子学者、新井白石が主導した、將軍にかかわる儀式の諸改革である。確かにそれは一種の「憲法改正」の試みであつたと思われる。

3. 新井白石の改革

新井白石が徳川政権の政治に強い影響力を有していた正徳4年(1714)2月、御公儀は、全国の26の地名について、「中古より誤り来りしを改むべし」という触れを発した。漢字の誤りを訂正せよというのである。更に、正徳6年(1716)4月には、全国の主要道路の正しい呼び方と書き方を指示する触れが出された。海がないのに海の道「海道」と書くのはおかしいから、「日光海道」「甲州海道」でなく、「日光道中」「甲州道中」と呼べ、中山道の「せん」ににんべんをつけるな、山陽道・山陰道と漢音呉音を混ぜるのではなく、「センヨウダウ」「センランダウ」と呉音で揃えて読め等という内容である。

瑣末で愚劣な命令と見えるかもしれない。しかし、後に、徳川政権自身が編纂した歴史書(『文昭院殿御実記』附録上)が、白石を用いた将軍を評して、「すべて名の正しからぬをきはせたまひ。物ごとに典故を正し給ひ…」と評する通り、それはあの「正名」の一環に他ならない。江戸と全国を結ぶ主要街道の名称が妄りであるようで、どうして正しい秩序が実現するであろうか。白石は、そう考えたのであろう。

更に、白石の発案によって、最も重要な街道、東海道が江戸の中心部に入る地点に新たに南向きの門が建築された(芝口御門)。儒学的君主は、北に座し、南に面するのが、鉄則である。それ故、首都自体も、中国都市に倣って作られた京都がそうであったように、王宮は北に、そして南の入り口に立派な門(ソウルの南大門も同じ)というのが当然であるからであろう。また、江戸城本丸御殿の入り口にも、南向きの華麗な門(中の門)が建設された。同様の意識からであろう。

ついで、上記の重要な儀式についても、次々と改革が実行された。

まず、歴代将軍を祭った場所の名称は「御仏殿」「御堂」から「御霊屋」へ、墓は「御廟」から「御宝塔」とへと改められた。そこに参詣する際の将軍の服装も、白石の考えでは古代中国の「礼」に合致する直衣という様式に改められた。また、将軍が孔子廟に祭る際の儀式も、新たに考案された。実際に将軍が、諸大名を引き連れて、白石の指定した服装と作法に従って、孔子廟に参ったのである。柏手こそがかえって中華の古えの作法に適っているとして、孔子廟で柏手を打ったという。湯島聖堂に響いた柏手の音は、如何に奇妙であろうとも、白石の考えでは、将軍が儒学的な君主であることの証明であった。

大名・旗本の「御目見」の際の式服も、改められた。身分毎に、色・形の指定もされた。それは新たな出費を伴ったであろう。しかし、白石の改正した武家諸法度も、「衣服居室の制、并宴饗の供、贈遺の物、或僭侈に及び、或節儉に過ぐ、皆是礼文の節にあらず」と宣言している。「其礼あれば。おのづから其の文あり。」で、分限に過ぎて立派でもいけないが、「分限に及ばざる所あれば。節限に過」ぎるのであって、それも正しくないのである。白石は、「礼」にかなった「御目見」の実現によって、正しい秩序が示され、確保されると信じたのであろう。

当然、将軍の即位式のような意味を持っていた将軍宣下の儀式も改正されるべきであった。白石の考えでは、関ヶ原の合戦によって天命が改まり(『藩翰譜』序)、家康以来の将軍は事実上の国王だったのであるから。朝鮮通信使に与えられた正式の書簡においても、「天厭喪乱、眷顧有道、我神祖受命、奄有万国」と明確に述べられている(「奉命教諭朝鮮使客」)。そこで、

宝永6年(1709)、宣下の際、白石はそれを間近で見学した。「もし其礼を(註:将軍が)議し申すべき事あらむには聞召さるべき御為」(『折たく柴の記』)であった。翌年には、京都に出張し、中御門院の即位の儀を見学している。これも同様の意図であったろう。当時の禁裏の即位の礼は、明治になって慌ただしく改められたものと違い、中国の模倣の色が濃い。禁裏様の服には龍の文様もあった。大いに参考になったはずである。しかし、この改正は実現しなかった。

その代わりであるかのように白石が力を入れ、朝鮮・日本国内双方での抵抗を排してようやく実現したのは、朝鮮通信使を迎えた際の儀式の大改正である。服装・儀式の内容は無論、音楽も、能楽から雅楽に改められた。無論、音楽の感化力は、「礼楽」と併称されるように、儒学では重要視されており、かつ、雅楽はその由来からして中華の正しい音楽に近いからである。朝鮮国王の将軍宛書簡の宛先も「日本国王」と改められた。白石からすれば、実態に即した正しい「名」の実現であった。

上記の朝鮮通信使への書簡は、「当今嗣徳百年、礼楽可由起」と宣言している。白石は「万代ノ礼式ヲ議定アルベキハ、マコトニ百年ノ今日ヲ以テ、其期也」(「武家官位装束考」)とも書いている。彼は、本気だった。建国以来100年、この徳川王朝の永続のため、それにふさわしい「礼」を制定すべき歴史的転換点にあると信じていたのである。そこで、首都の門、中央の宮殿の門、先祖祭り・孔子の祭り、臣下との謁見、即位の儀式、最大の外交的儀式——この朱子学者は、確かにその立場からして、これらの最も重要な「礼」について、次々と改革を試みたのである。

4. 吉宗による逆転

しかし、白石は孤独だった。理解者は少なかった。高位の武家たちは彼にあだ名を付けて嫌った。あだ名は「鬼」であった。著名な儒学者、服部南郭は「白石ハトカク江戸ヲ禁裏ノ如クスルツモリノヤウニ見ユ。武士ト云フ事キラヒ也。武備ユルミタレバ乱起ルベシ。(然)唯正名ト云フハカリニテ経済(註:政治を意味する)ハ次ナルベシ」と評した(『文会雑記』)。後に徳川政権自身が編纂した歴史書も、単に「この御代何事もうはしくとゝのひし事掟させ給ひし」(『文昭院殿御実記』附録卷上)とのみ評し、改革の思想的意味を論じていない。そして、近代の歴史家たちも、白石の他の改革は評価しても、その儀式改革の深い思想的意味を論じてはこなかった(政治的陰謀としての意味を見いだそうとする説はあった)。

一般に、個別の権力者の個人的信頼によって得た権力や影響力は、その権力者が不在となればただちに失墜する。白石においてもそうだった。八代将軍、吉宗の世に代わった瞬間、白石の力は、まったく失われた。しかも、吉宗は、白石の改革を次々と覆した。

中の門は、直ちに破壊された。芝口門は火事で焼け、その後再建されなかった。服装の改革は、すべて旧に戻された。朝鮮通信使を迎えての儀式もすべて旧に戻された。将軍宣下の儀式に何の改革もなされなかったのも無論である。白石の行った武家諸法度という最も重要な将軍の法の全面改正も、すべて取り消された。儀式にかかわる白石改革は、全面的に否定され、まるで何事もなかったようにそれ以前の状態に復帰したのである。

吉宗は、代替り直後、大名たちに対し、「天下治平の後年久しき事ゆへ。近世華美の風俗となれり。今よりは奢りを去り。節儉を守り。国政の事に。専ら心を用ゆべし」とみずから大声で命じたという（『有徳院殿御実記』附録巻2）。白石を「文飾過しもの」とも、評したという（同附録巻11）。中の門の破壊も、「皆近世華奢の風を、祖宗質素の俗にかへし給はんとの御心」（同附録巻2）によったという。將軍になる以前から白石の改革を苦々しく眺めていたのであろう。白石の改革を単なる贅沢好みとのみ解して、その「礼」の制作としての意味を理解しなかった彼は、その逆に「簡易」に「儉素」たらんとしたのである。

また、朝鮮通信使に関する儀式等の改革について、吉宗は、「其の事はことほりにかなへるにもあらめど。隣国に対し少しき礼教をあらそひ。かならず名を正し。礼を厳にせんとするは。遠を柔する道ともなしがたし」と述べたという（同附録巻3）。「正名」よりも、「礼」の実現よりも、とにかく隣国と争わないことが重要だというのである。

5. むすび

近代の多くの歴史家は、「享保の改革」は成功と評し、いわゆる「正徳の治」は「改革」とすら呼ばない。実質と実用のみが人を動かすという浅薄な実用主義からは、吉宗はある程度理解できて、白石は不可解となる。

しかし、儒学者の少なくとも一部は理解していたように、美もときに力である。18世紀、僅か9000家族、14000人しかいなかったフランスの貴族たち(François Bluche, *La noblesses française au XVIII^e siècle*, Hachette, 1995)が、あれほどの文化的支配力をもった一因は、明らかにその美にあらう。その点では、同時期の日本の公家も同じである。禁裏は美しかった。あるいは、少なくとも美しいと思われ描かれた。それは力であった。

現に、京都には「礼」があるが、武家の支配は「文」のないむき出しの暴力の支配であるとして反感を募らせ、その打倒さえ仄めかす人も、その後、現れた（山県大武『柳子新論』）。「雲上」での行事の「優美」さに憧れ、「我等如き武夫」は、せめて「御垣の外の衛」がしたいと書く大名の隠居もいた（松浦静山『甲子夜話』巻45）。そして、「古昔の王代の名目、風儀ハ…尤モ美シク、閑麗ニシテ、今トテモ公家ニハソノ風儀ヲ守ルユヘニ、雅ナル事ノミ多シ」（本居宣長『随筆』）と信じ、文献研究を通じての天皇への接近に生涯を費やした人さえ出現した。結局、吉宗が立て直したとされる武家の支配は、美的憧憬の対象たりえなかった。逆に、一世紀あまり後、何の実力も実用もないはずの「雅やかな」美を誇る存在のもとに結集した人々によって、それは打倒されたのである。

だとすれば、18世紀末に、白石の改革の挫折を「誠ニイカメシキ干戈ノ気ヲ去テ、郁々タル文国トモナルベキヲ、文廟（註：白石を信頼した6代將軍、家宣）ノ薨去ニ因テ、一朝ニソノ功ヲ廃セシハ、大ナル遺憾」と嘆いたある文人（南川維遷『閑散余録』）の言は、一面の真実を衝いていたのではないだろうか。

[Abstract]

Rituals of the Tokugawa Shogunate and Confucianism

WATANABE Hiroshi

The University of Tokyo

According to Confucianists, “Li” means proper patterns of behaviour of civilized people, such as manners, rites, rituals, ceremonies and institutions. They were enacted by the sage kings of the ancient dynasties of China and were revised by later emperors and distinguished scholars in accordance with social changes. They are not arbitrary creations. They are supposed to be concretized forms of “Dao” (the natural Way) or “Li” (the heavenly principle), which any human being should comply with as long as he or she wants to live in a civilized way. Therefore, if one transgresses them, that means that he or she is uncivilized or barbarous rather than wicked, and that such acts are one’s own shame rather than one’s sin. The people are expected to follow their rulers, and be unobtrusively influenced by the rulers’ exemplary implementations of “Li.” Thus Confucianists believed that it was especially important for the rulers to conduct courtly rituals correctly and elegantly.

The Shogun of Tokugawa military government in Japan conducted many rituals carefully. Their majestic rituals and ceremonies worked to confirm and strengthen their military and political prestige. But unlike Confucian rituals, the meanings of their rituals were often vague. There were no explanations of the precise meanings of rituals and ceremonies. To use the words of cultural anthropologists, their orthopraxy was clear and well-established, but their orthodoxy was unclear. Rituals and ceremonies were the “constitution” of Tokugawa Japan as it were, written not in letters but in concrete behaviour.

Arai Hakuseki(1657-1725), a Zhu-Xi Neo-Confucianist, who was politically influential during the reign of the 6th and the 7th Shogun radically reformed that “constitution.” His reforms have been regarded as formalistic and pointless by many of his contemporaries and later historians. But if we take the Confucian concept of “Li” into full consideration, Hakuseki’s reforms will appear to be significant and important. They were nothing but systematic efforts to establish correct and beautiful Confucian rituals and ceremonies in accordance with Hakuseki’s clear interpretations of the structure of the government. Hakuseki tried to transform the messy military government into a civilized one.

However, the powerful 8th Shogun rejected Hakuseki’s reforms and revived former traditions one by one. He had some understanding of Confucianism, but it seems that he did not understand the profound meaning of “Li.” As a result, Hakuseki’s reforms have been often regarded as “empty luxuries” and sometimes even interpreted as a political conspiracy to overwhelm the prestige of the imperial court of Kyoto by emulating its rituals.